

紹介

井上文則著

『軍人皇帝のローマ』

——変貌する元老院と帝国の衰亡——

一般に「危機の時代」と称される三世紀のローマ帝国。この時期に相次いで登位した皇帝たちの出自は、従前の元老院議員から、バルカン半島出身の成り上がり軍人（イリュリア人）へと変化していった。本書はかかる変化の要因と経過を問い、ローマ帝国における支配者層の変動を解き明かそうとするものである。加えて著者は、東洋史学者宮崎市定の史観に依拠し、三世紀のローマ帝国と同時代に生きた後漢の動向とを比較しつつ、ローマ帝国における支配者層の問題を、帝国とその文明の衰亡という「大きな物語」の中に位置づけようとするのである。

三世紀半ばに即位したウァレリアヌス帝の政策を変化の画期とみる著者は、第一章にてそこに至る歴史的背景を描写したのち、第二章で実際に、同皇帝の政策を吟味する。

同皇帝が実施したのは、外敵防衛を意図した、息子ガリエヌスとの帝国東西分担統治と、出自、経歴に依らない有能な軍務経験者への重要ポストの付与であった。ローマ市を不在にする皇帝と元老院議員の関係はますます希薄化し、かたや中央機動軍の創設によって皇帝と軍人の距離はいっそう縮まった。その結果、ガリエヌスの支配領域において主に兵士を供給していたイリュリア人が軍内で台頭するようになったのである。

第三章では、幕を開けたイリュリア人皇帝の時代が描かれる。皇帝をはじめとする帝国の要職を占めたイリュリア人の基盤は、ウァレリアヌス創設の中央機動軍であり、これが政治的にも新たな帝国の中心となっていた。さらに著者は第四章にて、かかるイリュリア人たちは、宮崎市定の提唱する、文明人と対比関係にある「素朴民族」として位置づけている。

イリュリア人の台頭の煽りを受けた元老院議員について描く第五章は、とりわけその文人的生活、および軍事部門以外における彼らの影響力増大を強調する。

第六章は再び時系列に戻る。ディオクレ

ティアヌスによる四分統治体制によって、皇帝麾下の中央機動軍におけるイリュリア人が相対的に弱体化した。その結果、コンスタンティヌスは、西方ゲルマン人の軍事力に依拠するとともに、彼は元老院議員を再び重用するようになったのである。

第七章にて、滅亡に向かう五世紀の帝国の状況が概観されたのち、終章で結論が述べられる。三世紀以来のイリュリア人の台頭は、軍人貴族層を形成したが、彼らは文人的な元老院貴族と同化することはなかった。この点は、帝国の民衆が、文人よりも武人を自らの支配者として選んだことを意味するとともに、ローマ帝国を漢と異ならしめる特質でもあった。実際、影響力を増した元老院貴族は富を蓄積していたにもかかわらず、都市への恩恵施与行為を停止してしまっただけで、彼らに対しては批判の矛先が向けられた。すなわち、ローマ文明の主たる担い手たる元老院貴族は変質し、もはや帝国の民衆の支持を得られない状況にあったのである。かかる状況にこそ、著者はローマ帝国の衰亡をみるのである。

近年、ローマ帝国の「衰亡」が改めて注目を浴びている。帝国の支配者層の推移か

らアプローチした本書も、かかる動向の中に位置づけられるが、本書第一の特質は、やはり衰亡に向かう洋の東西における帝国を比較している点にある。一方で、文人貴族への同化によって支配者層の激変が生じなかった漢帝国の行く末、他方で、文人武人の分化、そして文明の担い手であった前者への民衆の不支持により衰弱するローマ帝国の末路が明瞭に対比されているのである。かかるコントラストは、ローマ帝国の衰亡という史上大きな問題に対して、新たな光を投げかけるとともに、幅広い人々を同問題に巻き込む可能性を秘めているのではないだろうか。

(B6判 一二三頁 二〇一五年五月)

講談社 税別一五五〇円

(増永理考 京都大学大学院文学研究科博士後期課程)

会 告

去る六月二十五日に開催されました史学研究会理事会・評議員会におきまして左記の事項が可決、承認されましたのでご報告申し上げます。

記

一、平成二十六年年度決算報告

一、平成二十七年年度予算案

一、役員の交替

1、退任

常務理事

永原陽子 (↓理事)

吉川真司 (↓理事)

理事

吉井秀夫 (↓常務理事)

監 事

上原真人、小林致広

評 議員

早島大祐 (↓評議員)

中砂明徳 (↓理事)

金澤周作 (↓常務理事)

笠谷和比古、平 雅行

編集委員

中川未来、富井 真

庶務委員

井出健人、小川 伸

増永菜生、宮崎涼子

山本 亮

2、新任

常務理事

吉井秀夫 (↑理事)

金澤周作 (↑評議員)

理 事

永原陽子 (↑常務理事)

吉川真司 (↑常務理事)

中砂明徳 (↑評議員)

水野一晴

監 事

山澄 亨

評 議員

早島大祐 (↑監事)

山村亜希、黒田 卓

塚本 明

編集委員

谷 徹也、内記 理

庶務委員

小泉翔太、小堀慎悟

仲田詩織、森下 達

山内桜子

受 贈 誌

(二〇一五年五月一日)

二〇一五年七月二日

民俗学研究所紀要 (成城大学民俗学研究
所) 三九

史学研究集録 (國學院大學日本史学専攻大
学院会) 四〇

信濃 (信濃史学会)

六七―五